

## 開館 50 周年 超・名品 展



1) 和田三造《南風》1907年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館 重要文化財

### 本展のみどころ

開館以来、節目の折りに開催してきた名作展、名画展、秀作展、・・・(似ているようでちょっと違う)。5度目※となる本展では、今、ここでの「名品」とは何かを探ります。

#### 1 名品は、世につれ、人につれ。

何を「名品」とするかは、時間の流れのなかで少しずつ、あるいは、時に激しく変化してきました。また、人によっても、それは、微妙に、あるいは結構、違うのではないのでしょうか？本展では、そうした「うつりかわり」や「ちがひ」を念頭におきながら、新たな名品、復活した名品、誰も知らない名品を展示します。

#### 2 兵庫、神戸ならではの、の名品。

いやあ、世界がそうでも、日本がそうでも、やっぱり、兵庫ではアレだわ、神戸ではコレだわ、というようなことが、「名品」については、ありえます。そんな、地域ならではの名品、当館の50年間の活動によって、名品的地位を獲得したのではないかと思われる作品を紹介します。

#### 3 かわらぬ人気もの。

そうはいうものの、ひろく、みんなに人気のある作品というものがあります。それは「見たことがある」「誰でも知っている」という安定感が作品にくっつけた価値なのかもしれません。しかし、本展では、そうした一般的・俗的人气をおそれません。むしろ、そうした作品に内在する強い力を信じて、それが何かを探ります。

#### 4 しかし・・・。その先にあるもの。

いろいろ書いてきましたが、芸術・文化の世界では、実は、変化は意外に好まれず、よって権威主義の横行が許されてしまいます。「名品」という言葉には、芸術・文化のそんな側面が、うっすらと透けているのではないのでしょうか。そうです。であればこそ「名品」「名品展」に安心・安住してはいけません。そうした言葉を超えて、作品に<sup>あいたい</sup>相対し、再びなまなましい感動をみつめてほしい。そんな願いをこめた超・名品展です。

#### ※

1970年10月10日～11月7日

「開館記念 近代100年名作展」

美術館の開館を広く周知するため「よく知られた名品を」という方針で企画された。すでに設立されていた国立、私立の美術館・博物館、そして個人から作品を借用。昭和前期までの日本画、洋画、彫塑を展示して観覧者5万人以上を集めた。

1975年10月10日～11月9日

「開館50周年記念 近代100年名画展」

プロレタリア美術、戦前・戦後の反戦美術に分類される作品など、それまでの名作・名品展ではなかなか登場しない作品を、近代100年をふりかえるために必要なものとして加えた。開館展との作品重複はほぼなし。

1982年10月9日～11月14日

「新館開館 絵画から工芸まで 近代100年日本の名作」

文化勲章と文化功労者に範囲をしばり、前2回展では登場しなかった工芸、書を加え、「近代」の成果を確認。前2回とは異なりマスコミが共催者に。展覧会名にある「新館」とは、現在の横尾忠則現代美術館の建物である原田の森ギャラリー西館の意。

1990年5月19日～6月24日

「近代日本の秀作展－時代を貫く美－」

美術史の動向としての「リヴィジョンナリズム（歴史の見直し＝モダニズムの再検討）」を念頭に企画された。寄託作品を含む収蔵品で構成し、開館以来のコレクションの成果も紹介した。

## 開催趣旨

令和2(2020)年は、当館の前身である県立近代美術館が開館して50年目にあたります。本展はこれを記念して開催するものです。

開館以来の50年。この間、日本全国のみならず世界規模で見ても、美術の概念や社会における美術に対する期待のあり方は大きく変わりました。その中で、新たに発見・発掘された名品、解釈がかわることで新たな魅力が付与された名品があり、一方、オーラの幾分か減少することで評価の核心が見えにくくなった名品の存在があります。また、全国各地で美術館・博物館建設が進み、それらの施設が地域とのかかわりを探る中で、地域ならではの価値が見出されて名品となった作品もあることでしょう。

本展は、そのような作品の評価の変遷や、受容のされ方、あるいは作者と作品への関心が遠のくさまにも注目しながら、名品とは何か、何であったのか、そして美術館および観覧者にとって、どのような可能性を持ちうるのかを探ろうとするものです。

扱う時代区分としては、当館が前身の近代美術館時代から収集や展覧会開催の対象としてきた近代を扱うこととし、各作品の開館当時の美術状況と評価の地平を探る意図から、下限を近代美術館開館の1970年前後に設定したいと思います。また、この期間の美術の流れが概観できる構成とし、あわせて県内の美術を考える上で重要な作品、当館収蔵品のうち、50年の歩みの中で評価が確立した名品なども紹介することとします。

## 開催情報

特別展 開館50周年  
超・名品展

会期 2020年4月11日[土] - 6月7日[日]

開館時間 午前10時 - 午後6時(金・土曜日は午後8時まで) ※入場は閉館の30分前まで

休館日 月曜日(ただし、5月4日[月・祝]は開館、翌5月7日[木]は閉館)

会場 兵庫県立美術館 企画展示室(〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1)

主催 兵庫県立美術館、神戸新聞社、毎日新聞社

協賛 公益財団法人伊藤文化財団、一般財団法人みなと銀行文化振興財団

特別協力 公益財団法人日本教育公務員弘済会 兵庫支部

助成 一般財団法人安藤忠雄文化財団

### 観覧料金

区分	当日	団体(20名以上) / 前売(2020年4月10日(金)まで販売)	[その他割引適用料金]		
			区分	当日	団体(20名以上)
一般	1,300円	1,100円	70歳以上 <sup>1)</sup>	650円	550円
大学生	900円	700円	障がい者 一般	300円	250円
高校生以下	無料	無料	<sup>1)</sup> <sup>2)</sup> 大学生	200円	150円

1) 証明できるものの提示が必要です。

2) 障がいのある方1名につき、介護の方1名は無料。

※金額はいずれも消費税込金額です。

※コレクション展は別途観覧料が必要(本展とあわせて観覧される場合は割引あり)。

※70歳以上、障がいのある方は、会期中、館内券売所でのみ販売。

※主な販売場所: 兵庫県立美術館ミュージアムショップ(前売のみ)・阪神(当日一般のみ)・近鉄主要駅・JTB レジャーチケット(セブンイレブン、ローソン、ファミリーマート、ミニストップ/前売券:0253240、当日券:0253241)

## 展覧会構成

### 1 時代をさかのぼって

調査・研究によって再評価された作品、新たに発見され作家の評価に再考を促した作品、めぐる時間の中で変らぬ魅力を発し続ける作品などを中心に展示し、明治中頃から明治末・大正初頭までの意外に幅広い作品を紹介します。



2) 高橋由一《豆腐》1877年 油彩・キャンパス 金刀比羅宮蔵

担当学芸員の  
ひとこと

#### 由一の代表作は、やっぱり豆腐？

この絵のあとにも先にも、豆腐を描いた絵にはほとんどお目にかかりません。高橋由一(1828-1894)は、みんながよく知っている物や風景を絵に描いて毎月展覧会を開いていました。本物のように描ける油絵のスゴサを知ってもらいたかったからです。お焼き豆腐の焼き加減が激しすぎるようでもありますが、豆腐は今の私たちにも身近なので、その本物らしさは、花魁より新巻鮭(塩引き鮭)よりもよく分かるではありませんか！1877年に由一が奉納して以来「こんびらさん」こと香川の金刀比羅宮がこの絵の持ち主で、ずっと展示されてきたことにも、感激。50年前の「開館記念 近代100年名作展」にも展示された名品です。

担当学芸員の  
ひとこと

#### この絵で、正太郎、一発逆転！

「濁酒が渴きを癒してくれる、黄葉の村の小店」といった意味のタイトルがついています。教育者としてよく知られる小山正太郎(1857-1916)ですが、永らく絵の実力の程はよく分かっていませんでした。それどころか、政治好きで一徹な面が強調されすぎて、日本の近代美術史上でなんとなく「損な役回り」の人でした。しかし、近年出現したこの絵は彼への評価を一変させました。そうです！小山正太郎は自然へのロマンティックな憧憬をもち、それを表現する確かな技術を持った人だったのです。この絵がきっかけとなって、小山だけでなく、彼の周囲にいた画家たちが同じ頃に描いた作品の魅力もよりよく分かるようになってきた、そんな一発逆転のエピソードをもつ作品です。



3) 小山正太郎《濁醪療渴黄葉村店》1889年 油彩・キャンバス ポーラ美術館蔵

担当学芸員の  
ひとこと

#### でかした、三造、重要文化財だ！

兵庫県生野町(現朝来市)生まれの和田三造(1883-1967)が第1回文展に出品し、見事、最高賞を受賞した作品です。文展とは、文部省が主催してはじめて「官」の展覧会で、やはりそれなりの「権威」でした。三造、弱冠24歳、並みいる先輩画家をさしおいての受賞です。「人物の関係がよくわからない」「船と海がつながっていない」「風は本当に吹いているのか？」といういろいろ言う人もいたのですが、大勢の見方は「小さな欠点はあるが、これでいい。いや、むしろこれがよい」という方向に落ち着いたようです。おりしも、1904年に開戦した日露戦争での勝利の直後とあれば、世間は右肩上がりのイケイケムード。そうした雰囲気作品を重ね合わせる人もいたことでしょう。というわけで、今や、注目度アップの三造《南風》、見逃す手はありません！



1) 和田三造《南風》1907年 油彩・キャンパス 東京国立近代美術館 重要文化財

## II 芸術と芸術家の時代

大正期を語る定番ともいえる個性派の作家の作品、1980年代中頃以降の研究で、存在感を増した新美芸術といわれる新しい傾向の作品を展示します。あわせて、確立しつつある芸術家像のもとに、作家と作品の関係が整理されていく様をうかがいます。



4) 柳瀬正夢《五月の朝と朝飯前の私》1923年  
 油彩・キャンバス 武蔵野美術大学 美術館・図書館 蔵



5) 佐伯祐三《リュクサンブール公園》1927年  
 油彩・キャンバス 田辺市立美術館蔵

担当学芸員の  
 ひとこと

### ああ、青春の大正期新興美術運動

十代の頃から絵を描いて郷里松山や育った門司で有名だった柳瀬正夢(1900-1945)が24歳の時、東京で描いた絵。「マヴォ」という変わった名前のグループが1923年7月に開催した展覧会に出品されました。その1か月余り後、関東大震災に遭遇し、助けられるどころか逆に憲兵隊に逮捕された柳瀬は、これをきっかけに無産者階級の立場から制作することをはっきりと決意したので、この絵は「運動」に本腰を入れる前の最後の作品だとも、いやすでに「運動」に向っている作品だとも、いろいろ言われ、それに応じて画面に描かれたものがさまざまに解釈されています。もちろん、五月の朝が感じられ、始まりつつある何かに希望の予感を見ていた若い柳瀬の情熱がよくわかるという、青春の一枚という側面もあります。ただ、1900年生まれで、東京大空襲で戦災死した作者にとっては、人生半ばを過ぎた時期の作品であり、没収等を恐れて柳瀬が自宅に巧みに収納、というか隠していたために現在の世に残った作品であることも忘れてはいけないでしょう。

担当学芸員の  
 ひとこと

### ずっと、人気もの

30歳で死んだ佐伯祐三(1898-1928)の一生はとても短く、死ぬ間際の面妖な状況などを知ると悲劇的な画家と思ってしまう。しかし、大阪の裕福な寺の息子として生まれ、東京美術学校卒業後も東京に住んで結婚し一家を構えてアトリエも建て、家族連れでパリに渡った、と聞くと、アレアレ? ずい分恵まれてるな、とも感じます。これは、彼がまだ芸術家でない段階から、彼を芸術家として遇し、愛していた周囲があつてこそなのでしょう。にもかかわらず、悲壮感と焦燥感のつきまとう1927年夏からの2度目のパリ生活での生活と制作は、私たちを芸術家とその人生への深淵な思いへと誘います。本作はこの2度目のパリ生活の前半に描かれました。木立の境目から見える高い空と一部見えている青さが、2度目のパリの佐伯の嬉しさを物語るようです。慎重、強靱な造形力も感じられ、没後すぐの発表当時から注目された作品のひとつです。旧蔵者も見巧者・有名なコレクターで佐伯の作中、画集収録の最も多い有名作でもあります。

### III 巨匠と大衆の時代

昭和期に入って美術の独立ジャンルとして認知され、かつ大衆的人気の的になった写真や版画を交えながら、やはり大衆に支持されることで明確に出現した巨匠・大家の作品を展示します。

担当学芸員の  
ひとこと

#### 瞠目すべき巨匠の精進

キレイな若い女の人が美しいキモノを着て行儀よく座っている。この絵を、そうした「ありがちな」絵の中の単なる一枚だと思っははいけません。この絵には、自身の様式(絵の描き方、といった意味です)をすみずみまで貫こうとする画家の執念がつまっています。試しに、頭の中でこの絵を8~10cm四方の碁盤の目に区画して、一区画ごとに順番に見ていけばよい。スゴイ集中力で隅から隅まで手を抜かず、描きに描いたことが分かるから。うーん、これ以上描けない、つまり終わるべきところで終わっている絵、ということでもあります。「そんな変な絵の見方をわざわざすることないではないか」というご意見はもったもですが、本作の数年前から始まる安井曾太郎の様式確立へ向けた精進ぶりは、常識的な絵の見方ではとてもとらえきれません。



6) 安井曾太郎《座像》1929年 油彩・キャンバス 個人蔵



7) 安井仲治《公園》1936年 ゼラチンシルバープ  
リント・紙

担当学芸員の  
ひとこと

#### アマチュアたちのラディカルな精進

昭和期に入ると、芸術の大衆化現象は、作り手の裾野の広がりとしてはつきりと現われます。学校で学ぶとか徒弟奉公するとかいうルートで技術を学ぶことなく、自分の楽しみを目的に、いわば我流でモノゴトに進んでいく人が増えてきたのです。彼らは「アマチュア」と呼ばれ、時に揶揄の対象になったりもしますが、美術の分野では深淵かつ強靱な創作活動は、実はこのアマチュアリズムによって支えられてきました。彼らは表現を成り立たせている形式に果敢に踏みこんでいきます。例えば、安井仲治(1895-1942)は、家業に従事しながら、浪華写真倶楽部と丹平写真倶楽部などでの活動を通じて、「写真とは何か、写真は芸術としてどのように成立するのか」を問うていました。熟達、完成、確立といった、精進の先にある実りを示す言葉から遠い果敢な挑戦として、今一度、彼らの作品を見るべきではないでしょうか。

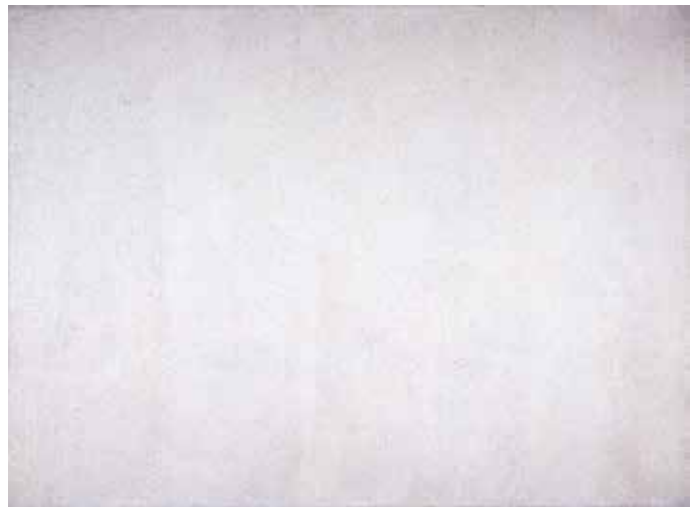
#### IV 美術館と歴史化の時代

戦後まもない頃から当館が開館した1970年までの作品を展示します。現在の美術を歴史的に解釈しようとする態度から、その逆説性や現在いっそうクリアになった同時代性のゆえに評価され、名品の位置にかけのぼった作品群です。

##### 担当学芸員の ひとこと

##### きよほうへん 毀誉褒貶のはてに

作者の草間彌生(1929～ )は、前衛美術家として平成28年度の文化勲章を受章しました。その際の、赤いお河童頭と水玉模様のワンピースといういでたちで、さらに有名になった感のある作者ですが、その歩みは自己自身の内部での不断の闘いと、そのような自己と他者との闘いを含む非常に複雑なものでした。人々の理解などとは別のところで展開した彼女の人生を、いまや、わたしたちは流行として消費しているのではないかと心配になるほどの人気です。しかし、たとえ流行と人気をきっかけに接したとしても、人々は、草間の作品から一貫する何かを受け止め、感動につなげているようです。その何かとは、人間の不確かな生と、そこから派生して私たちにしつこくつきまとう不安、なのかもしれません。とすれば、草間の作品は今日の私たちに最も身近かなもので、従って高齢になってからの最大級の賛辞と評価はむべなるかな、です。



8) 草間彌生《No. B White》1959年 油彩・キャンバス  
千葉市美術館蔵



9) 篠原有司男《女の祭》1966年  
蛍光塗料、油彩、プラスチック・板  
兵庫県立美術館蔵

##### 担当学芸員の ひとこと

派手な蛍光色、プラスチックの簪<sup>かんざし</sup>、テンガロンハットと祝の手拭い。いまや日本のポップアートの代表作といえる本作です。作者の篠原有司男(1932- )はそれまで、頭をモヒカン刈りにし、絵具をしみこませた布の塊を両手にはめ、広げた布をボカスカ殴って描いたボクシングペインティングやネオ・ダダ・オルガナイザーズの仲間たちと繰り広げたパフォーマンスなど、自身の肉体を核にした制作を展開していました。人の真似をしてつくるイミテーション・アートを経て、明治初期の錦絵をヒントにしたのが本作。繊細で上品な北斎や広重や歌麿ではなく、血なまぐさい物語や事件を題材にしたこの時期の錦絵を直観で選択したところ、そしてそれを見事に料理しえたところ、そして何よりそれまでの牛ちゃんこと篠原有司男の「前衛の道」の途上における、この時点での集大成であったところが名品たるゆえんで、いまやモニュメンタルな風格さえ漂う作品です。

## 関連事業

### ○講演会

#### ①「名作の条件」

講師：北澤憲昭氏（美術評論家、美術史家）

日時：5月6日（水・振休）14時より（約90分）

#### ②「近代美術館を振り返り、県立美術館に期待する」

講師：山野英嗣氏（和歌山県立近代美術館長）

日時：5月10日（日）14時より（約90分）

いずれも、ミュージアムホールにて（定員250名）、聴講無料

※兵庫県立美術館「芸術の館」友の会会員優先席あり

### ○学芸員によるレクチャー

日時：5月2日（土）、5月16日（土）16時より（約60分）

場所：当館レクチャールーム（定員100名）

※聴講無料

### ○学芸員によるガイドツアー

日時：4月18日（土）、5月9日（土）、5月30日（土）16時より（約50分）

場所：企画展示室

※聴講無料、要観覧券、企画展示室入口付近集合

### ○こどものイベント「アタマにかぶってるもの、なあに？」

日時：4月25日（土）13:30～15:30

場所：アトリエ2および企画展示室

※要事前申込、詳細はHPをご覧ください。

### ○ミュージアム・ボランティアによる解説会

日時：会期中の毎週日曜日 午前11時より（約15分）

会場：レクチャールーム（定員100名）

※聴講無料

## お問い合わせ先

兵庫県立美術館  
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1  
TEL: 078-262-0901 (代) FAX: 078-262-0903 (代)  
https://www.artm.pref.hyogo.jp

取材・画像提供に関すること

営業・広報担当

TEL: 078-262-0905 (担当直通) FAX: 078-262-0903

展示内容に関すること

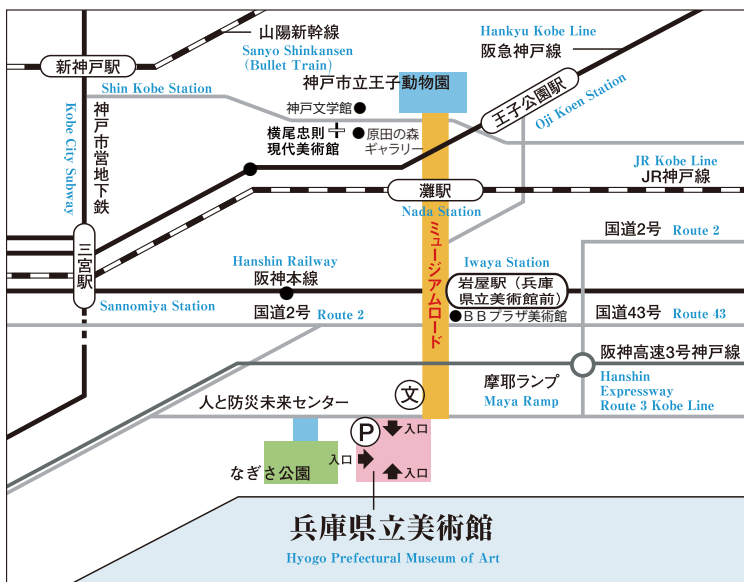
担当学芸員：西田桐子、出原均、橋本こずえ

e-mail: nishida@artm.pref.hyogo.jp (主担当：西田)

TEL: 078-262-0909 (学芸直通) FAX: 078-262-0913 (学芸直通)

## 【交通案内】

- ・ 阪神岩屋駅(兵庫県立美術館前) から南に徒歩約8分
  - ・ JR神戸線灘駅南口から南に徒歩10分
  - ・ 阪急王子公園駅西口から南西に徒歩約20分
  - ・ JR三ノ宮駅南から神戸市バス(29、101系統) 阪神バスにて約15分  
HAT神戸方面行き「県立美術館前」下車すぐ
  - ・ 地下駐車場(乗用車80台収容・有料)
- \*ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください  
\*団体バスでお越しの場合は、バス待機所のご予約をお願いします。



## 画像使用に際しての注意

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。末尾の「申込書」をご使用ください。

○作品画像を媒体掲載される際には、「申込書」に記載の作品名・制作年・所蔵などを必ず入れてください。

○作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・変更はできません。

○画像データ使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。それ以外での使用はできません(会期終了まで)。

○再放送、転載など二次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。

○雑誌の表紙などに使用される場合は、「営業・広報担当」までご相談ください。

○WEBサイトに掲載する場合は、画像を72dpi以内に設定のうえコピーガード(※右クリック不可)を施しダウンロード不可にしてください。

○基本情報、図版使用の確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で「営業・広報担当」までお送り願います。

○展覧会場の取材、撮影をご希望の場合についても、「営業・広報担当」までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。

○本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体(VTR/DVD)、URLなどを、「営業・広報担当」宛てに、1部お送りくださいますようお願いいたします。